

大地は寂し

春の日

若き春の日の思い出よ
霞にくもる野にも山にも
黄に紅に桃色に
花という花の咲きほこる
生命乱舞の日の野遊び
花か蝶かはた小鳥か
ひら／＼と舞い狂う二つの巴
富める者の子も幸福であった。
貧しき者の子も幸福であった。
桃の花咲く丘の上で三人は語る。

「ね！ 今日三月十日です。私たち三人は、これからどんな道を行くか知れないのです。もう近い内に別れ別れになるのです。三月十日をおぼえているのです。そして十年たったら会いましょうね。十年先に生きていたならきつとお会い致しますしょうね。」

三人の目からは涙が流れた。それから幾度も／＼春が来た。鎮守の森かげには年々に紅い椿の花が咲き、谷の小川には秋ごとに紅葉を浮かして流した。時こそは神秘なるものであるよ。ものみなを予想せぬ世界へ／＼と運んでゆく。

何故泣くのです。……………私はたった濁りなのです。
あまりにその顔が暗い。……………希望も光もなくなつたのです。
元気がない。血の色がない。……………我が肉体は病みました。
あなたの目には曇りがある。……………一切の人が私を虐げました。
あなたの上には落ちつきがない。……………私はたゞおびえています。
あなたの上には温かさがありません。……………世間はあまりに冷酷です。
あなたの上には無邪気さがありません。……………私は清きものの一切を失つたのです。
あなたの上に力が見えない。……………私には力とたのむ一切がありません。

丘の上の桜の花の色は昔に変わらない。谷の小川のささやきも昔に変わらない。しかし若き日の純な心は失せてしまった。花は咲けど、鳥は歌えど、この心は暗い。流転の子のふむ大地は、至る所に不幸と苦悩の影がつきまとう。十年の年月はこの子を暗黒の世界に引き回した。

生きねばならぬという事実、生れて来たという事実、死なねばならぬという運命、その生と死との間を、けなげにも人の子は、彼の力のある限りをつくして戦つてゆく。

光へくと願つたことが、そのまま暗より暗への進行であつた。

孤独

あなたはそれを知りました。孤独であることを知りました。そうだ孤独だ。たった一人だ。

聖者は彼らが持つ智慧によつてこれを知り、凡人は人間の苦悩に打ちくだかれて、それを知る。

春の日の野辺に遊び戯れた歓楽の裏には、早くもこの暗い影がついていたのです。しかもそれをまぎらしていたのです。

落ちるものは落したがいい。こわれるものはこわしたがいい。

強くおなりなさい。今こそその孤独の暗さに大胆に真向から直面しましょう。道はそこから開ける。

何でもその暗いうつろを満たすのではない。

真剣に、大胆にその孤独の世界に徹底しよう。新たなる永遠の道はその脚下から開ける。孤独をにぎやかにするために、騒々しい手段を選ぶのではない。

展転して新たなる世界が生れた時、人類に対するほんとの愛と、永遠なる道は、この孤独の唯中から湧く。

手を出して握手してはならぬ、一切と手をふりきるのだ。

やがて孤独を孤独だと照す光の上に汝自身を永遠に生かす生命がある。

光とは

光とは何を言い、希望とは何を言う。

若き日は幻影を描く。幻影は若き日の特権でもある。

しかし描かれた幻影は何であつたか。

美しい恋愛、錦を着て故山に帰る日の夢。

若き日の光とは、愛欲と名利に対する夢のことではなかつたか。

汝の親たちも、汝の師匠たちも、汝がやがて「名」ある人になることを求めた。名誉なるが故に徳を強いた。名のために学問をした。名のために成績優等を競うた。

やがて汝の心のうちには愛欲の根強い力を感じた。そうしてそこに異性を発見した。恋愛を感じた。恋愛は人生で唯一のものだという学説を聞いた。そして恋が人生の全部だとさえ考えた。恋愛を成就するためにあらゆる障害と戦つた。恋愛が成就する前に我と、我が周囲とを血みどろにしてしまった。我を傷つける者は、他をも傷つける。

愛欲

印度で釈尊御出世の頃に一人の頭のいゝ青年がいた。彼の名を「アヒンサカ」といった。彼は全印度の尊敬の的である婆羅門の大聖者たらんがために、ある婆羅門教の大徳の弟子となった。その師匠の妻を「ミーヤ」といった。アヒンサカは今や弟子たちの間でも特に道心堅固な頭のいい正直な男として師匠の愛を一身に受けてをつた。弟子たちの間でも羨望の的であった。

ある時その師匠が旅行した留守の間のことであつた。そこに恐しい事件がその留守宅におこつた。月の清いある静かな夜である。

「何という美しい月だろう。露にシットリとうるおつている地上の清らかさ。こうした大地を踏まえて立つてしていると、本当に自然の美しさを思う。月の青白い光をうけて万象は静かに夜の眠りに入ろうとしている。私の魂までが清らかな世界へと引きあげられるように思われる。大地のめでたさに引き替えて、人間の心は何という大きな悩みを持つことであろう。このごろ私はしみじみと人間という者がいとおしく思われてならぬ。」

とアヒンサカが考えつゝ庭を散歩している。そこへ、師匠の夫人ミーヤから使いを言いつけられた小使は手紙をもつて来てそれを渡し、

小使「どうか御返事を下さい。それでないとならぬと私が奥様から小言を受けますから。」

アヒンサカ「それは気の毒だね。しかし返事がどうして差し上げられよう。出来ないことなのだ。私の魂はそれがために乱れようとする。」

師匠の夫人ミーヤはアヒンサカに恋しているのだ。度々の手紙には燃ゆるような恋の熱情が封じこめてある。彼はつばやく。

「本当に使いする者も気の毒に思われる。だが私の心の近頃の乱れはどうしたことなのだ。すべての力を合して強く強く心を引きしめようとしているようでも、砂で築いた垣のように、ともすると崩れようとする。今も木かげで弟子たちの話を聞けば何も知っているのだ。おゝ信じられることは苦しい。師匠様も旅への出立の際、たくさんな弟子達の中でお前だけは信ずる事が出来ると仰言つた。外の弟子たちも私を信じてくれる。(夫人は木陰で聞いている) 信じられることの苦しさが余計に私の心を苦しませる。奥様の便りを使いを持つてくる度に、その前では見向きもしないけれど使いの者が去つたあとで、飢えた犬が魚をしゃぶるように、私はその一字一句に心奪われる。初めのほどは間違つたこととして、さほどにまで心を乱さなかつたのに、二度三度重なるにしたがつて私の心は悩みをましてきた。近ごろの自分は、もう自分で自分を支える力さえ失うたような気がする。奥様が昔のミーヤであつたら、この悩みは喜びいとなつたかも知れないのに………私は一切が分からぬようになってきた。」

形は謹み深くしているものの、その内心は不義の恋に動かされつゝある。このさゝやきを木かげでできた夫人は、急いで出て、アヒンサカにその苦しい胸を訴える。

「私は今木陰でお前のつばやくのをすっかり聞いてしまった。そしてお前が私のために悩んでいることを知つて、私の冷く氷りかけた心に熱い血が躍り始めた。お前の心はやつぱり私の幻影で悩んでいる。私の思つていた通り、お前は私のものなの

だ。アヒンサカ、私の耳はお前の声に飢え、私の唇はお前の唇を求めてかわいてい
る。お前のミーヤがここにいる。」

「奥様、あなたは何と云ふことを仰せられます。あなたは師匠さまの奥様です。乱
れがましいことを仰せられますな。五欲の楽しみから起る罪でも色欲は最も重い
枷だ。そしてその重い枷の中でも横しまの恋は最もはげしい地獄の苦しみに働す
ると御師匠様は教えて下さいました。どうかこの上私を苦しめないで下さい。」

「横しまな恋は地獄の苦しみに働すというのかい。師匠の言葉をまねることも
美しいことだ。がそれはほんとうのことなのかい。今さつき私のために悩むとお
言いだつたじゃないか。口では美しいことを言つても、お前の胸は私の愛におの
いているじゃないか。そんな堅苦しいことはおよし。それよりも私のこの胸にお
前の耳をつけてごらん。私の心臓のとろろきが聞えるもの……。」

「奥様、私は悩んでいます。あなたの言葉は私には恐ろしく響きます。しかし何と
仰せられても私には横しまな恋を受け入れることは出来ませぬ。それは地獄の道
を歩むことです……。」

「お前は横しまな恋だと言いだけれど、なぜ心より愛する男を恋してはいけない
のだ。そして愛する二人が抱きあうのがなぜいけないのだ。水は低きに流れ、火は
空にのぼる。飢えたる者がパンを求める。それは当然のことじゃないか。恋する
二人が抱きあうのも自然なのじゃないか?……。」

愛に飢えた肉の女は火のような誘惑を男にこころみる。彼女は自分の夫を肉を貪
る犬だと罵り、聖者のように粧うて人達より名と財とを求める偽善者と言ひ、
4

「……私をこの邸から外の世界につれて行つてくれ、お前は私の愛を受け入れ
ようとしながらも、世間体を粧うて無理にそれを押えつけているのだわ……あなた
なは私の愛の眼でたくさんな男の中より選び出した唯一人の男だもの。あなた
は弱い隣れを求めるこの女の力なのです。さあ私をこの邸から連れ出してくれ。
外の世界には甘い恋の甘酒が二人の来るのを待っています。もしそれが出来なけ
れば、天も地も日も月も滅びるがよい。そしてこの情熱に痛む私の胸もそれと共に
滅びてくれ。……。」

アヒンサカの心は動いた。

心のうちに強い二つの力のたたかきを感じながらも彼は遂に女性の力に動いた。

名利

その翌日である。彼は昨夜の恐ろしい誘惑と自分の心の動揺を思い出して言った。

「……昨夜は奥様と一緒に今宵はこの邸を抜け出そうと約束した。情熱に燃え
た奥様の言葉を聞いてみると甘い恋の世界がふんわりと溶けて来る。そして全身
の血潮が高鳴るように思われる。……。」

しかしその時、彼は又別なる声が彼の心を誘惑した。彼は思った。

「師匠様はこの度の旅行より帰ると婆羅門教の奥義を伝えてやるとおっしゃつ
た。そしたらお前は全印度の求めて止まない最高の名誉たるリスの地位に入る
のだ。宇宙の真理が私のものとなり、私は真理の体現者としてあらゆる人達の尊敬

をうける。世は聖者のためにあらゆるものを供養し莊嚴する。かくて聖者は世の光となつてすべての人に生命の祝福を与える。世は限りなく美しく聖者の言葉によつて飾られる。王侯も貴族も聖者の前に脆いて教えを求め。聖者の生命の輝きは太陽の光と共に変わることはないのだ。(幻惑されたように) おゝ私はその最高の名譽を今得ようとしているのだ。」

そのように考えている時、彼の盲目になつた母が訪れる。母は彼に着物を与え更に「それではまた明日は来て御師匠様や奥さまにお礼を申し上げることにしよう。この前にお伺ひした時、ご師匠さまは私に『彼は大層智慧も勝れているのに、その上一生懸命勉強するから、今はほとんど婆羅門教の真理を学びをおわつた。いづれ近いうちに奥義も伝えようと思う。そうなると思ふと彼も独立して数多の弟子をとらねばならぬ。かくて彼も全印度の聖者として尊敬を受けるようになるのだ。私としても本当に嬉しく思う。たくさんな弟子たちはいても婆羅門教の奥義をうけて聖者の衣鉢をつぐものは本当に少ないのだからな。』とおっしゃつた。私はそれを聞いてどんなに嬉しかつたか知れない。それでこそ、せつかく今日まで育てきた甲斐があつた。」

母は親切に我が子を励まし、我が子をいたわつて出て行つた。しかし母の喜びは徹頭徹尾我が愛子の出世にあつたのだ。アヒンサカの心は今や「名譽」に対する欲念で占領されつくしてしまつた。

ああ、名利と愛欲！名利に非ずんば愛欲、愛欲に非んば名利。人間の右往左往、頭燃を払うが如くするもの、全てこれ名利と愛欲につきる。

アヒンサカの頭は混乱する。

「おお、私は狂うているのだ。歩いてはならぬ禁断の道を歩もうとしているのだ。恐ろしい沈黙の夜が地上をつつんだ。あの真暗がりの中から私を破滅の淵へつき落そうとする妖魔の精が現れてくるような気がする。だがその妖魔の香ばしい息を求めている何者かが私の内に躍っている。おお、お母さま、師匠さま、神さま！このみぢめな私を救つて下さい。私の行く道をはつきり教えて下さい。」

そのとき夫人が急いで出てくる。そうしてアヒンサカに言う。「どうしたの！泣いているじゃないか。さあ約束だ。この邸からぬけ出よう。時は容赦なく過ぎてゆく。さあ早く、二人の恋の巢に必要なだけのものは用意してきた。月の出ぬ間の闇はわたしたち二人をかくもうてくれる。アヒンサカなにゆえ泣いているの……………」

ミーヤは力一ぱい彼を誘惑するために、あらゆる言葉をつくして求めぬいた。けれどもアヒンサカは女のものではなかつた。

「約束しました。その美しい言葉に魅惑されて約束しました。けれど私は弱かつたのです。ご師匠様は『弱さから一切の悪は作られる。』とお言いになりました。私はもつと強くなつてはいけなかつたのです。さつきもお母さんは『おまえが私の力だ』とお言いになつた。恋は一時のまぼろしにすぎない。情熱の火もいつまでもは燃えつゝかない。きつと消える日がくる。私はやつぱりお母さんの愛と師匠さまのお情にかえらう。そこに私の魂の安息所があるのだ。」

ときつぱり言つてしまふ。
 女は益々愛を求め。悲痛な哀願がくりかえされる。それでも聞かない。今はもう夫人のいかなる言葉も訴えもアヒンサカの前には力ではなかつた。

復讐

師匠は帰つた。ミーヤ夫人の胸のうちには瞋恚の炎が燃えさかつた。そうして恐ろしい劇は展開されてゆく。

師匠 「どうしたのだ。たゞ泣いていたのではわからない。何事ぢや。おまえの乱れたその姿は……………」

夫人 「夫をもつ女の貞操を侵した者の運命はどうなります。」

師匠 「妙なことをたづねるな。有夫の女の貞操を侵すものは人倫の破壊者だ。そんなものは最も重き刑罰に価する。」

夫人 「私は口惜しうございます。あのアヒンサカに手ごめにされました。私は彼のために貞操を破られたのでございます。」

師匠はこの意外の言葉に驚いた。そして怒つた。復讐心は火のように燃えた。夫人は言葉巧みにたきつけた。そうして夫婦の間には呪われた手段が考えられた。

やがて彼らの前によびだされたアヒンサカは恐ろしい命令を受けねばならなかつた。師匠は彼に婆羅門教の奥義を伝えてやると言いきかせ、

「それには百人の人の命を断つてくることじや。それはバラモンの最高の荣誉を荷負ふものにとりては最も軽い負担なのだ。生命は生命によつて償われる。バラモンの6生命たる物法を得るには生命を持つてせねばならぬ。」

とて恐るゝ彼に一ふりの剣は与えられた。「きつと証拠をもつて参れ」とのきびしい師の命を受けて彼はたつた。師匠は後姿をみて言つた。

「師の妻を侵し、人倫を乱した者の罪に価する刑罰だ！」

釈尊

アヒンサカは師匠の言葉を信じた。逃げまどう人々の後を追うて手あたり次第斬り殺してそこに指を一本きりとして指の鬘をつくつた。舎衛城下は修羅の巷と化した。彼は心のうちにおこる苦悩を殺しつつ、この恐るべき約束をはたそうとした。軍兵どもが彼を捕らえようとする。百の指はいま少しで満たされるときであつた。そこへ釈迦牟尼世尊はあらわれたもうた。釈尊は彼をじつとみていられる。釈尊を見るや彼は斬つてかかろうとするがたじたとして一歩も動けぬ。

「沙門、止め！〜」

「わしは最前からこゝにじつと立っている。お前がひとりで動いているのだ。」

「何だ……………どうも不思議だ！一体そこにおるのは誰なのだ。」

「わしは仏陀釈迦なのである。」

アヒンサカはなおも荒れ狂う。釈尊の眼は慈愛に輝く。如来のみ口から懇々と説法が続けられる。

積尊 「お前は痴想に駆られてみだりに人命を傷うている。みな愚痴よりうまれる行為なのだ。お前のその姿は愛欲と名利との愚痴に囚われて狂うている者のすがたなのだ。それは滅ぶべき者の歩む道である……………」

人々は無智よりおこる欲念のために縛られて、自ら地獄の道をたどっている。真実の平和は正しき智慧の世界にのみある。わたしはその欲念を克服して独り真理を楽しんでいる。おまえはそのまゝわたしに随つてくるがよい。」

指鬘外道！ それはアヒンサカの名であつた。けれども、積尊の慈愛は彼の迷夢をさました。彼は今や積尊の足にひれ伏して教えを乞うた。

三つの力

その時である。軍兵どもは指鬘外道を見出したので逮捕しようとする。

隊長 「あなたは仏陀であらせられます。この殺人の森に単独にて御出かけになりまして、本当に物騒でございます。何用でいらせられましたか。」

積尊 「わたしは哀れなる一人の殺人者を救うべくきました。あなた方は……………」

隊長 「ハントク王の命令で、その殺人鬼をとりおさえにまいりました。けれども未だにその姿を認めることができません。」

積尊 「それは御苦勞でした。その恐ろしい殺人鬼は、己の姿を悔いてここに脆いております。」

(シマンを指す、軍兵共は急に縛そうとする。積尊これを止める)

積尊 「彼は今自分の愚さを悔いて救いをわたしに求めている。剣をすてた者は剣によつて縛してはならない。王にこの由をお伝え下さい。」

隊長 「あなたのご偉徳は実に高大でございます。この由をとくと国王に伝えましょう。」

みんな去つた。夫人はあと見送りつゝ、

「あの汚い比丘はついにアヒンサカをつれて行つた。私の情熱に焼きつくされぬ世界がどこにかあるのか知らん。私はどうなるのだろう。」(細川崇圓氏「大地にむせぶ者」より按載)

合掌の日

愛欲と名利、それなくしては人生はない。

しかしながら愛欲や名利は描かれたるまぼろしであつて決して光ではない。積尊はむしろそれらを無明の心の動きだと教えた。

真実の光とは智慧である。智慧の本源は如来であり涅槃である。

痛ましい輪廻の子よ。私と一緒に如来の聖座に合掌しよう。

痛む心、汚れた心は決して痛む心汚れた心によりては救われぬ。

高い世界から光が訪れる。その訪れた光が煩惱に狂う心の上に顕現して、そのまゝを救う。

合掌の日、愛欲と本質を異にした清浄願心が御身の上に動くであろう。

大地の上はかぎりなく寂しい。愛欲や名利に傷いた心を抱いた者は殊に寂しい。

生命の揺籃、春の日の心にかえろう。
かすかにも静かなる光がおん身の上に平和を与えるであらう。